

令和 2 年 9 月 17 日現在

機関番号：10102

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18603

研究課題名（和文）アイヌ古式舞踊・歌の記録・保存・伝承・教育用データシステム構築にむけた基礎研究

研究課題名（英文）Research for constructing basic data system to archive Ainu traditional dance and songs

研究代表者

岩澤 孝子（IWASAWA, TAKAKO）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40583282

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、北海道アイヌ（鶴川アイヌ文化伝承保存会）および樺太アイヌ（樺太アイヌ＜エンチュ＞協会）の歌や踊り（アイヌ古式舞踊）を対象に調査研究を行い、「文化変容」および「文化の再現」をキー概念とした次世代型の芸能伝承システム構築を目的とする。本研究の成果物である映像資料は、芸能実践共同体の高齢化や伝承実態の衰退といった課題解決への契機になると期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

【学術的意義】従来型の記録（調査時点における伝承実態をそのまま記録）を超えて、将来の伝承者育成に役立つツールとして、文化変容および再現という視点を組み込んだ記録・伝承のあり方を再考・実践したという点において、アイヌ古式舞踊の研究に新たな視座を与えたと考える。

【社会的意義】研究過程で明らかになった事柄を研究者と対象者間で共有したことによって現在の文化保持者に与えたインパクトは大きく、次世代の伝承者育成、または、芸能を中心とした実践共同体の育成に向けた意識改革に一定の効果があったと考える。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the current situation of Traditional Ainu Dance, Hokkaido and Sakhalin Ainu, based on the field research and explores the new approach of record and transmission for the next generations. In the case of Hokkaido, main members of the association are aging and they feel anxiety with insufficient human resources, while Sakhalin Ainu are facing with crisis of disappearing tradition.

For giving a resolution, we produced two types of video as an alternative transmission system under the key concepts: acculturation and re-enactment. We did the comparative analysis between past and present to clarify the acculturation and we applied motion capture and computer graphics to re-enact traditional Sakhalin Ainu dance. Both academics and cultural holders have continued dialogue and sharing the research results with together. We advocate that such a dynamic process as well as output could prompt community of practice to revitalize their own traditions for future.

研究分野：民族音楽学、舞踊学

キーワード：アイヌ 舞踊 伝承 文化変容 文化の再現

1. 研究開始当初の背景

本研究では、北海道アイヌと樺太アイヌの二事例を対象とするが、これらの二つの集団において芸能実践の具体的内容・現在の伝承実態・文化保持者の環境が異なり、研究の流れおよび成果が異なることから（2の目的以外は）個別に記述する。

（1-1）北海道アイヌ

「アイヌ古式舞踊」は、1984年に文化財保護法に基づく重要無形民俗文化財に指定（1994年に追加指定）、2009年にはユネスコの無形文化遺産に登録され、北海道内の17団体がその保持団体に認定されている。文化財として再評価が契機となってアイヌ古式舞踊が保護すべき貴重な人類の文化財である、との認識が進み、保存伝承への必要性が広く求められるようになった。また、主に倭人との交流に端を発する同化政策などの影響を受けて生活文化の変化を余儀なくされたアイヌにとって、アイヌ古式舞踊が彼らの民族的アイデンティティを表現する重要な文化資源である、との認識も浸透している。特にこの傾向は、通称「アイヌ文化振興法」（1997年制定）によって一層強まり、北海道各地のアイヌ文化保存団体を中心に積極的な活動が展開してきた。

文化財指定時の調査は、1983～87年（第一回）、1990～92年（第二回）の二回実施され、調査資料や記録映像が残された。この時からすでに30年程の年月が経過している。この間数度にわたるアイヌ古式舞踊の調査が文化庁ほかの助成で実施されたが、伝承やアーカイブ化に耐えうるデータが未だ蓄積されていないという状況にあった。研究開始当初時点において、すでにその様態や文化保持者をめぐる環境が変化しており、また、過去の記憶を有する文化保持者が高齢化していることから、アイヌ古式舞踊に関する本格的な再調査を実施し、将来の伝承に備えた新たな伝承プログラムを構築する必要があった。

（1-2）樺太アイヌ

このように、北海道アイヌの古式舞踊が保存・振興の潮流にある一方で、北海道における少数派である樺太アイヌの場合は文化財指定を受けていないばかりか、ほぼ伝承されていないという深刻な状況にある。樺太アイヌの歌や踊りは「ほとんど失われた」存在であり、それを具体的なイメージを持って回復することは困難な状況にある。このような現状を打開し、単なる記録を超えた身体レベルでの樺太アイヌ文化の復興を推し進め、アイヌ古式舞踊を介した実践共同体を育むためには、北海道アイヌとは異なるアプローチでの文化の再現が求められた。

2. 研究の目的

本研究が、アイヌ古式舞踊・歌の「保存・伝承・教育用データシステムの構築に向けた基礎研究」と位置づけられることから、単なる現状の記録・保存を超えて、将来の伝承に有効なデータ/ツールとして対象となる実践共同体の舞踊・歌を記録しておく必要がある。そのためには、アイヌの民族理論に根差した舞踊や歌の研究（分類・意味・動きの分節化・伝承過程）が重要なのは言うまでもない。これらは、現地調査や文献研究を通して明らかにする。次に保存会の活動実態について調査し、過去との比較によって文化保持者のあり方の変容についても考察する。これらの考察結果から予測される将来の潜在的文化保持者（後継者、周辺の参加者）に対して、どのような伝承プログラムを構築すべきか検討し、具体的な方策を提示する。

3. 研究の方法

本研究は、①「文化変容」および②「文化の再現」をキー概念として、二つの文化保持者団体（鶴川アイヌ文化保存伝承会、樺太アイヌ＜エンチウ＞協会）を対象に調査を実施し、それぞれの文化保持団体に適した記録映像を開発・制作した。北海道アイヌと樺太アイヌの各事例に関する研究方法は以下のとおりである。

(3-1) 北海道アイヌ

伝承の現状調査 → 先行研究(1990年採録映像)との比較分析 → 過去からの変容を明文化 → 次世代向け伝承映像の制作(再現を含む)

(3-1) 樺太アイヌ古式舞踊の再現

樺太での現地調査 → 先行研究(1984-85年採録映像)と分析 → 再現演目の選出 → 子孫らによる演目の習得(歌の再録) → モーションキャプチャ撮影 → CG映像制作 → 今後の活用に向けたディスカッション

4. 研究成果

(4-1) 北海道アイヌ、文化変容

(4-1-1) 伝承実態と課題

調査時点において、文化財としての外部評価やアイヌ文化振興の推進といった社会情勢が追い風となって、当該保存会では月例会での伝承やコミュニティ内外での演舞体験を通して、アイヌ古式舞踊に関する積極的な活動を行っていることが明らかになった。しかし、このようなポジティブな要素がある一方で、進学や就職のために若年層の安定的参加が困難であるが故に当該保存会の主たる活動は60代~70代の会員に委ねられている。将来の伝承に対する不安要素が課題として浮き彫りになり、従来型の口頭伝承が困難になるケースに備えて将来の伝承ツールとして使用可能な映像制作の必要性があらためて確認された。

(4-1-2) 過去との比較分析

鶴川アイヌの古式舞踊に関する変容の傾向として、「芸能実践の場の変化」と「パフォーマンスの定型化と洗練」の2つがあげられる。アイヌ古式舞踊はかつて、アイヌの日常生活や儀礼において、主にコミュニティ会員による参加型パフォーマンスであったが、現在は文化振興を目的とした舞台上での「見せる」パフォーマンスへと移行した。また、アイヌの生活様式の変化は過去のパフォーマンスには見られた「即興」という要素を減退させ、逆に、舞台化に伴う「定型化」と「演技の洗練」を生じさせている。

1990年に北海道教育委員会が鶴川で実施した調査で採録された映像にある10の演目と本研究で調査時での伝承実態を比較すると、(A)既に伝承実態のないもの、(B)ほとんど伝承されなくなったもの、(C)積極的に伝承されているもの(ただし、ほとんどの演目で微細な変化が見られた)、の3種類に加え、(D)新たに加わったもの、が存在することがわかった。

1990年時点と調査時点の両映像に関する比較分析は、研究者と保存会会員が協働で実施した。それによって、現在の伝承者らにその変容がより具体的に認識されたと言える。

(4-1-3) 次世代へ向けた伝承システムの構築

調査時点での伝承実態をベースにしながらも、演目のコンテキストや過去からの現在に至る変容に関する情報を組み込み、将来の伝承ツールの一つとして使用可能な映像を制作した。映像には、10の演目を収録したが、その内訳を上記のAからDの分類で整理すると以下のようになる。

(A) 《ホリッパ》※の再現

(B) 《イウタウポポ》の再現、《ヤイサマ》の再現

(C) 《ウポポ》、《ホリッパ》※、《フッサヘロ》、《ハララキ》、《イヨソルイカ(ゆりかご型)》

(D) 《ムックリ》、《イヨソルイカ(おんぶ型)》

※ (A) と (C) の《ホリツパ》は名称は同じだが、歌・舞踊共に異なる。

撮影には、鶴川アイヌ文化伝承保存会会員、および、北海道教育大学（札幌校・岩見沢校）の学生らの協力を得た。学生はアイヌ古式舞踊の経験がない者ばかりで、初めて学ぶの伝承者の役割を果たしてくれた。

「文化変容」という視点から検証することで、現在の伝承者らがこれまでに蓄積してきたアイヌ古式舞踊に関する経験や記憶といった「身体知」を具現化した映像資料を作成することができた。この資料は単なる記録として保存するだけではなく、今後の伝承ツールとして活用可能なものとする。

（4—2）樺太アイヌ、文化の再現

（4—2—1）樺太アイヌの歌・踊りに関する音声・映像研究の変遷と現状

樺太アイヌ＜エンチウ＞協会会員の証言から「本研究の調査時点において樺太アイヌの古式舞踊はほぼ伝承実態がない」というのは、（1—2）で既に述べた通りである。そのことは、先行研究（樺太アイヌ古式舞踊に関する研究のうち、音声および映像資料が残されているもの）の精査を通して明らかになった。

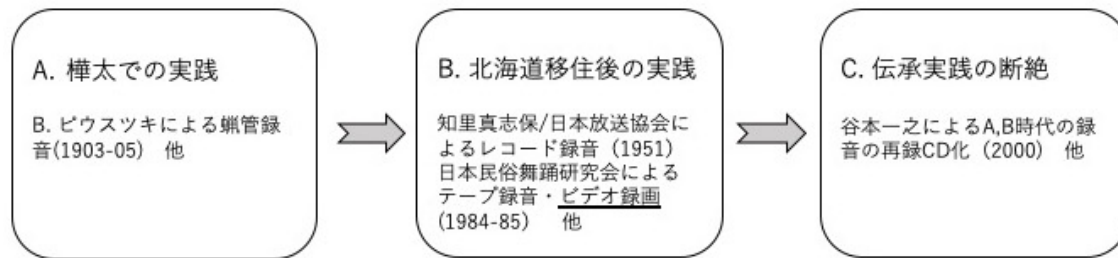


図1. 樺太アイヌの歌と踊りに関する記録（音声または映像の記録がある先行研究）の流れ

樺太アイヌの歌や踊りに関する研究は20世紀初頭に始まっているが、その流れは図1のように、大きく3つのフェーズに分類することができる（図1）。樺太での実践を記録したもの（A）から北海道移住後の実践（B）の移行期は樺太アイヌが第二次世界大戦後に樺太から北海道へ（強制）移住したことが契機となっている。特にA期にはバラエティ豊かだった樺太アイヌの芸能実践が徐々に衰退し始め、21世紀になると伝承実践の断絶（C）へと移行し、現在の樺太アイヌ古式舞踊は既に危機的状況にあったことがわかる。舞踊の再現映像制作を目的とした本研究では、先行研究の中で唯一映像記録を残した日本民俗舞踊研究会（1985）を参考とした。

（4—2—2）映像資料の制作

樺太（ロシア・サハリン州）での現地調査を実施し、樺太アイヌ古式舞踊関連の資料として衣服その他のデータを収集した。主たる先行資料となった日本民俗舞踊研究会（1985）を参考に、樺太アイヌ古式舞踊の歌と踊りを映像資料から分析し、「ジャンルの多様性」と「再現可能性」という二つの観点から再現可能な演目を5つ選出した。その内訳は表1の通りである。

さらに、樺太アイヌ＜エンチウ＞協会の協力を得て、選出した演目の学習会を実施し、歌および踊りの習得に努めた。同協会会員の肉声による歌唱を録音し、その音源に合わせて演舞する様子をモーションキャプチャで撮影・記録したのち、そのデータを基準に樺太アイヌ古式舞踊のコンピュータグラフィックス映像を制作した。なお、CGによる舞踊の再現映像制作にあたっては、松永 康佑（札幌市立大学）および研究室学生らの協力を得た。

『カラフトアイヌ古式舞踊』(1985)		CG化された演目(2020)	
ジャンル名	内容	演目	備考
ヘチレ	熊祭りの踊り	《ヒーッココ》	女性の踊り
		《タツカラ》	男性の踊り
トウス	祈祷の踊り	×	音声不明瞭で再現不可
チボハウ	舟漕ぎ歌	《イソーラヒンソイ》	
イフンケ	子守唄	《イフンケ》	
シノッチャ	叙情歌	×	映像がなく再現不可
その他		《ブルブルケ》	

表1. 再現演目の内訳

(4-2-3) 実践共同体の育成へ向けた映像活用

北海道アイヌの事例と異なり、映像を制作する際にCG技術を応用したのは、本研究の調査時点で樺太アイヌ古式舞踊の伝承がほぼ途絶えていたことに起因する。CG上に表現される仮想空間では、演舞する人数や背景、衣装などある程度自由に設定することが可能である。もちろん、映像化のプロセスにおいて、樺太アイヌ<エンチウ>協会会員が実際に歌い、踊るという要素は必須であったが、衣装や小道具、演者の人数等の条件が十分に揃っていなくても、実現可能だからである。

CGによる文化の再現を通じて、芸能の実態やコンセクストをイメージしやすくなり、現段階ではその担い手が少数であっても、この映像を介して祖先の文化をより具体的に共有可能となる。本研究のプロセスは、その成果物のインパクトもさることながら、樺太アイヌにとって将来の芸能実践共同体を育む道を拓く大きな契機となると期待される。ただし、現代を生きる樺太アイヌにとって、今後これらの歌や踊りがどのようなコンテクストで再現・共有されるべきか、さらなる議論が必要である。

〈参考文献〉

- 谷本 一之 2000『アイヌ絵を聴く—変容の民族音楽誌』北海道大学図書刊行会
 知里 真志保 1948「アイヌの歌謡(第一集)」『知里真志保著作集第2巻 説話・神謡編II』(1973)
 平凡社: 301-322
 日本放送協会編 1965『アイヌ伝統音楽』日本放送出版協会
 日本民俗舞踊研究会 1985『カラフトアイヌ古式舞踊』(昭和59年度文化財国庫補助事業調査報告書)
 北海道教育委員会 1991『平成2年度アイヌ古式舞踊調査報告書(I) —白糖・新冠・鷗川—』
 北海道立アイヌ民族文化研究センター編 2009『鷗川地方に伝承されるアイヌの音楽についての調査研究』(北海道立アイヌ民族研究センター調査研究報告書5)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岩澤 孝子、百瀬 響、坂本 恵衣	4. 巻 42
2. 論文標題 アイヌ古式舞踊の記録と伝承－鶴川アイヌを事例として－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 舞踊學	6. 最初と最後の頁 1,11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岩澤 孝子、百瀬 響、坂本 恵衣
2. 発表標題 アイヌ古式舞踊の記録と伝承
3. 学会等名 第70回舞踊学会大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 遠藤保子、弓削田綾乃、高橋京子、瀬戸邦弘、相原進	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 199
3. 書名 映像で学ぶ舞踊学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

岩澤 孝子、百瀬 響 2020a 『鶴川地方に おけるアイヌ古式舞踊 初習者向け伝承プログラムの構築 』（平成29年度－平成30年度科学研究費助成事業挑戦的研究（萌芽）報告書 DVD+報告書）
 岩澤 孝子、田澤 守、松永 康佑、百瀬 響 2020b 『モーションキャプチャおよびCG技術による樺太アイヌ古式舞踊の再現』（平成29年度－平成30年度科学研究費助成事業挑戦的研究（萌芽）報告書 DVD+報告書）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	百瀬 響 (Momose Hibiki) (10271727)	北海道教育大学・教育学部・教授 (10102)	